

マリアさま



★ え・やのしげこ ふん・わせたあきこ

マリアさま

え・やのしげこ ぶん・わたあきこ



女子/竹口舎

きりすは

おとうさんも おかあさんも としを とって
やっと 生まれた ひとりっぴです。
かみさまに おねがいで おねがいで
やっと 生まれた ひとりっぴ。
とつても かわいい おんなの子です。
おとうさんと おかあさんは
だいに だいに そだえました。
てんの かみさまの ことを おしえ、
おいのりを おしえ、
せいしよを よんで きかれます。
いつまでも すなおで
こころの やさしい くに なるように。



マリヤが うつくしい むすめに なつた とき、
あっちこっちの おかものが けっこんしたいと いって きました。
だいくの 首をうらも その ひとり、ふたりは やさしく いいました。

「ふたりで いい うちを つくりましょう。
かみさまが いっしょに すんで くださるような
あつたかい、へいかな かぞくに なりましょう。」
かみさまに おつかえしながら くらしたい、
ふたりの こころは おんなじでした。



それから まらない ある 日の こと、
子守じいの 顔の せうせいの いえに
かみさまの みつかいが あらわれました。
「おめでとう、かみさまの めぐみで いっぱいの せうせい。」
びっくりして いる せうせいには、てんしは つづけて いました。
「びっくりしないで、わたしは てんし せうせいさん。
あなたに かみさまの おわがいを しらせませう。
おとこのせうせいが 生まれたら、子守じいさまと なまえをつけて
だいに そだてて くれますか。
このせうせいは リっぱな 兄になり、かみさまの みつと よばれます。
せうせいは しんじて くれますか。
「わたしは かみさまの めしつかい、
おっしゃるとおりに なりますように。」



フリアは とい 島の しんせきの
エリザベトおばさんを
たずねて いました。



エリザベトおばさんは、ここで かみさまの おこえを ききます。
「この 人は すくいぬしの おかあさん。」
エリザベトは おおよろこびで フリアを むかいました。
「ああ フリア、かみさまを しんじた あなたは しあわせ。
かみさまが おっしゃった ことは、まったく そのとおりになります。」
フリアも うれしくて たまりません。
しぜんにかみさまを たたえる うたが でて きました。
「わたしの ところは おどります。かみさまが
わたしに くださった おめぐみは、いつまでも みんなの よろこび。」



娘の月が たちました。
千代子の 前へ マリアと 白せうは
てんじが、よくそくした あからんのことさ かんがえながら
しあわせに くらして いました。
そこへ、あふりに おうさまの かけつけが つたわったのです。
「みんな せんその 前へ、かえって、よくしよに なまえを せどけなさい、
白せうの せんその 前へ、えんごん、とおい あなごの 前でした。」

「マリア、どうしよう？ おなかの あかちゃんば、だいじょうぶかな。」
白せうが、しんぱいそうに しゃべりました。
マリアは、むかしむかしから、せいしよに 歩いて ある ことを
おもひだしました。
「えんごん、せんその 前、けれど
すくい出しが、ここで、おまねる。」
「いままじよう、まっと かみさまの おのせみです。」

えんじ屋に ついで あると
やどやほ どこも まんいんだし、
まづしろうな ふたりを みて、
みんな くびを ふるばかり、
しかたなく、
やっと みつけた うまやの なかで
その よる 子えんじまは
お生まれに なったのです。
きんじよの ひつじかいたちが きて、
そっと おがんで いました。

